



Title	太宰治『津軽』論：帰京した「私」に注目して
Author(s)	鈴木, 文乃
Citation	若手研究者フォーラム要旨集. 2026, 12, p. 73-76
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/106326
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

太宰治『津軽』論

― 帰京した「私」に注目して ―

日本文学・日本語史学 博士前期課程2年
鈴木 文乃

先行研究の問題点と本発表の目的

太宰治（一九〇九―四八）『津軽』（一九九四）は、「新風土記叢書」（小山書店）の第七編として書かれた作品である。東京で暮らす津軽出身の「私」は他作家の享年に近づいたことで死を意識し、作家としての今後に不安を感じるようになった。その解決を「津軽人」になり原点回帰することに求めて、故郷へ生き方の手本となる「純粹の津軽人」を探すべく、友人や実家を訪ねた。旅に際して、「私」は「食い物に淡泊なれ」と心に決めていた。津軽の人々は配給された酒や食べ物を集めて歓待してくれた一方で、東京の食料事情を聞いたり土産を持たせたりする人はいなかった。そのため「私」は気軽に旅を続けることが出来た。その後「私」は養育係のたけとの再会に向けて北へ移動していく。

本作はその成り立ちから旅行記として読めるため、自伝的作品として作家論や作品論を中心にしつつ、装丁や引用された作品について論じられてきた。特に「私」が捜し当てようとした「津軽人」とは何かについて議論されている。確かに作中で「津軽人としての私をつかもうとする念願」でなされた旅であると明言している。そのため、「津軽人」とは何かを明らかにすることが重要だと考えられてきたからである。作品構造の分析から「津軽人」を捜す旅は兄と「私」の対立に取って代わられたと述べる安藤宏¹、「都会人」としての「私」を受け入れてくれる存在が「津軽人」であると主張する岡田美秀²、近年では安藤論に則りながら「津軽人」を養育係のたけに見るように構成されていると述べる滝口明祥³がいる。しかし、これらの論は津軽を旅する「私」または語り手の視座の中で論じられており、旅から帰り作品を語る前の「私」の視座が十分に検討されていない。

本発表では、津軽旅を終え帰京した「私」の存在に着目することで、従来議論されて

¹ 安藤宏『「津軽」の構造』（「太宰治3」一九八七年三月、洋々社）

² 岡田美秀「太宰治『津軽』論―「都会人」と「津軽人」との間に―」（「國學院大學大学院文学研究科論集」、二〇〇一年）

³ 滝口明祥「ネイションをめぐる旅…太宰治〈津軽〉」（「太宰治スタディーズ」7、二〇二三年）

きた「津軽人」捜しは、作品解釈において重要とはならないということを主張する。

一、旅から帰京した「私」の重要性

『津軽』は、「私」が「或るとしの春」津軽半島を三週間ほどかけて、一周した出来事について、旅を終えてから語っている。本作は幾つかの異なる時間軸によって構成されている。大きくは津軽で生活した幼少期の時間と、津軽を旅している時間、津軽旅を終えて東京で『津軽』を書いている時間とがある。序編では「私」の初期作品である『思ひ出』⁹や「おしゃれ童子」¹⁰を引用しながら幼少期の「私」の思い出が語られている。また、本編では津軽を旅行中の「私」に内的焦点化をしながら語られる。つまり、『津軽』の中には旅をしている「私」と、旅を終えて『津軽』を書いている「私」とがいることがわかる。

一方で、例外もある。本編「一 巡礼」で「私」が旅の心構えを語る場面には、津軽旅から東京へ帰って来た直後の「私」の様子が書かれている。

帰京してみると私の家にはそれぞれの旅先の優しい人たちからの小包が私よりも先にいっぱい届いていたので呆然とした

本編で中心的に語られるのは、「私」が東京の家を発ってから、小泊でたけと再会するまでの旅中である。そのため、この一文は津軽から帰京した直後の「私」に内的焦点化して書かれているという点で、津軽旅とは異なる時間軸の「私」の存在が挿入されているといえる。

『津軽』研究初期には、旅中の「私」の言動から当時の太宰が津島家乃至は長兄やたけをどのように捉えていたのかを読み取ろうとする作家論的な視座から分析されてきた。また、作品論では語り手によって『津軽』がどのように構成されているのかに注目されてきた。津軽を旅する時間軸の「私」と現在語っている「私」とが、それぞれ重点的に分析されてきたが、帰京直後の「私」についてはあまり意識されてこなかった。しかし、『津軽』を語っている「私」によって、語る内容を選択されていることから、小包を受け取った「私」の存在に着目して分析していくことも不可欠である。旅に際して、「私」は、生き方の手本となる「津軽人」を捜し当てる企画を持っていた。そして、「実に容易に、随所においてそれを発見」することができたと語っていることから、「それ」の発見は全ての旅を終えた「私」によってなされたものである。つまり、小包を受け取って呆然とした「私」も、語り手の思考に影響していたと考えられる。よって、帰京した直後の「私」に着目し『津軽』を分析することは旅の主題を理解する上で欠かせない

⁹ 太宰治『思ひ出』（海豹）、一九九三・四一七）

¹⁰ 太宰治「おしゃれ童子」（『婦人画報』、一九三九・一一）

要素になる。

二、「津軽人」捜しに対する「私」の意識

帰京した直後の「私」が書かれている一文については、直接的な先行研究での言及がほとんど見当たらない。その原因として、『津軽』が、「私」の生き方の手本となる「津軽人」とは何かを明らかにしようとする文脈を持つていることが関係している。『津軽』では津軽旅に際して、「私」の生き方の手本となる「津軽人」を捜し当てる企画があったと書かれている。そして、「私」は「随所に於いてそれを発見した」とあるため、津軽旅の主題を表象するものとして「津軽人」が意識されてきたと推測する。そのため、東京の「私」の家に「旅先の優しい人たちからの小包が私よりも先に一ぱい届いていた」という一文そのものには、注目が集まらなかったのである。

しかし、この「津軽人」とは何を指すのかという問いに対する答えは作品の中に明示されていない。また、帰京した「私」の視点を踏まえるならば、むしろ「津軽人」とは何かを問うこと自体が重要ではないと考える。

まず、帰京した「私」が「津軽人」という言葉を使用していないことである。安藤宏は、『津軽』の構造⁹で作品構造を分析し、途中から「津軽人」という言葉が出てこないことを示している。そして、東京で暮す「都会人」としての「私」と「津軽人」とが対比されて書かれたものの、金木の家で兄たちと会った辺りから、兄たちと「私」という構造へと入れ替わっていることを指摘している。つまり、途中から「津軽人」という言葉が出てこないことよって、「津軽人」とは何かを捜す企画は、旅から帰った「私」には意識されてなかったといえる。そして、帰京した「私」が受け取ったのは旅先で出会った「旅先で優しい人たち」からの小包であったという帰京後の時間軸が一文のみ書かれていることで、「私」が捜し当てたのは、「優しい人たち」だったと強調されているのである。

次に、送られた小包に対して「私」が茫然としていたところを分析していく。なぜ「私」は茫然としたのかというと、津軽滞在中、誰も食料の話をしていなかったが、東京の家に小包が「一ぱい」届いていたからである。「私」は、東京の人が食糧不足を訴えて地方に食べ物を貰いに行っているという噂を聞いたため、「食い物に淡泊なれ」ということを心掛けて旅に臨んだ。また、「私」は津軽の人々に、配給では足りないから「白米乞食」をしに来た都会人だと思われないかと用心もしていた。しかし実際は、

⁹長野隆「太宰治『津軽』論」〔学術雑誌論文〕、一九九六・一〇）は、「常に現在のな語り」で書かれていることで「時制の規制をかわしてしまうような物語の時間を築いている」と述べている。このように作品全体の構成から、複数の時間軸が複雑に構成されていることを述べるものはあるが、直接帰京した「私」の時間軸を明示したものが確認できていない。

「岡田美秀「太宰治『津軽』論——「都会人」と「津軽人」との間に——」は、東京で生きている「私」を受け入れてくれる受け皿の表象として、滝口明祥「ネイションをめぐる旅…太宰治〈津軽〉」は、「死」に思い悩む「私」を救済する、ナシヨナリズムの共同体の表象として、それぞれ「津軽人」とは何かを分析している。

東京の食料事情を聞いてくる人や、食料をあれもこれも持つていけとお土産にする人はいなかった。そのため、旅中の「私」は軽いリュックサックで気軽に旅をすることができていたのである。

津軽旅の間に「私」が出会ったのは「食べ物などの事にはあまり敏感ではない」人々であった。その人々が「私」が東京の家に帰るよりも早く小包を「一ぱい」送ってきたという出来事に「私」は呆然としていたのである。このような津軽の人々の贈り物は、旅行中に「私」が受けた歓待と類似しつつも異なる性質をもっている。「私」が津軽で受けた歓待は「私」をその場でもてなそうとするものである。特に、「津軽人の愛情表現」と書かれている「果ては自分の命までも」差し出そうとする歓待は、「私」を家に招き、ありつたけのもので接待しようとするSさんに例えられてきた。一方で、東京の「私」の家に届いた小包は、旅を終えた「私」に宛てたものである。「優しい人たち」によつて送られたとあることから、送り主は、津軽旅中の「私」に直接接待することのなかった人も含まれていると推測できる。

これらの小包を受け取った「私」は、戦時下に、限られた配給の食料等から小包を送るという行為が、東京で暮す「私」への食糧支援として捉えられることを理解していたと考える。しかし、語り手は「信じるところに現実はあるのであって、現実を決して人を信じさせることが出来ない」という言葉に従った。そして、「私」が津軽から帰つても旅先の「優しい人たち」からの心遣いを受け取っていたのだと信じて、小包を受け取った出来事を語ったのである。よつて、この時点で「私」は、出会った津軽の人々を「優しい人たち」であると捉えており、「津軽人」とは何かという問いは意識されていなかったと考える。

終わりに

『津軽』には、語り手と津軽を旅している「私」との間に、帰京して津軽の優しい人々からの小包を受け取った「私」が存在している。帰京した「私」は津軽旅の後の時間軸に存在しており、語り手の思考にも影響を与えていることがわかった。帰京した「私」が小包を受け取ったことについて、「津軽人」ではなく、「津軽で出会った優しい人たち」より届いたとあることから、「津軽人」とは何かという問いは旅の終わりに意識されなくなっていたといえる。

本発表では、旅をしている最中の「私」が、どのように語られているかという点には言及ができていないため、さらに分析を進めていく。また、「私」が津軽へ行って東京へ戻っていくという構造は、太宰治の他作品にも見られる。今後、〈旅人〉的な観点から、それらの太宰作品の語りとの関連を調べていき、他作品の分析に活かすことが可能か追究していく。

※ 「私」の家に奉公していたT君と同じ蟹田分院の事務長をしている人物。